

会館だより

2012年 7月号 第277号



公益財団法人 日中友好会館

「会館だより」7月号の内容

行事案内

《日中友好会館美術館》

- ・「美しい中国、美しい日本
— 共に歩んできた40年写真展」

《日中友好後楽会》

- ・7月談話会

活動記録

- ・5月談話会
- ・北区日中友好協会主催
“日中友好促進懇談会”に後楽寮生が参加
- ・“世代友好中日青少年友好交流文芸晚会”
で後楽寮生が大活躍

トピック

- ・中国国際交流協会主催
「理解と協力」対話活動
開会式における基調報告
- ・日中国交正常化40周年
— 友好・反覇権・歴史が原点

ドキュメント

- ・日中歴史研究・出版助成事業

会館行事と人の動き

表紙

『霸王別姫』 韓羽 作

(水墨画 2008年 28×30 cm
劉海粟美術館所蔵)

行事案内

日中友好会館美術館

◆「美しい中国、美しい日本 —共に歩んできた40年写真展」

会期：7月5日(木)～13日(金)

時間：10時～17時(最終日は15:00まで)
※初日は10:00より開幕式

主催：中国国務院新聞弁公室
中国駐日本国大使館

入場料：無料

本展示は中日国交正常化40周年を記念するため、中国国務院新聞弁公室と中国駐日本国大使館の共催、日本国外務省の後援による写真展です。中国国務院新聞弁公室が行う「感知中国・日本行き」という大型文化交流イベントの重要な催事の一つで、「日本人から見た中国」と「中国人から見た日本」をテーマに、日中両国のカメラマン撮影の写真を展示し、40年の日中友好の発展の道を振り返ります。多くの皆様のご来臨をお待ちしています。

【お問合せ】

中国外文局・人民中国雑誌社 東京支局
電話：03-3951-6908

日中友好後楽会

◆7月談話会

詳細は別途ご案内いたします。

【申込み・問合せ】

後楽会事務局 小林陽子
電話：03-3811-5305
FAX：03-3811-5263
メールアドレス：bunka@jcf.or.jp

活動記録

◆5月談話会



講師の班文林さん

5月31日、寮生の班文林さんを講師に迎え、「電子音楽の世界と作曲」をテーマに講義を行いました。班さんは、内モンゴル出身で、現在は東京藝術大学にて、伝統楽器を用いたコンピュータミュージックを創作、論文執筆中です。講義では、電子音楽の基礎知識、現代の形にいたるまでの様々な電子音楽について、実際の音楽を聴きながら分かりやすく説明し、最後には班さんが彫刻作品や映画とコラボレートして作曲した曲を聴かせていただき、電子音楽が少し身近になった講義でした。(後楽会事務局)

◆北区日中友好協会主催

“日中友好促進懇談会”に後楽寮生が参加

後楽寮と北区日中友好協会とは長年交流があり、スポーツ大会やバス旅行などに参加しています。1月末には春節餃子パーティーに参加し、芸術団の披露もありました。また、後楽寮の国慶節や春節のパーティーには北区日中友好協会の方々にもお越しいただいています。

5月26日、“日中友好促進懇談会”に後楽寮生と留学生事業部職員が招待されました。総会の後に行われた懇談会では、まず

北区の区長でもある花川與惣太会長の挨拶に続き、中国大使館友好交流部の孟素萍一等書記官の挨拶があり、北区の都議会議員や東京都日中友好協会、北区日中友好議員連盟の紹介がなされた後、後楽寮のメンバーも参加者の皆様にご紹介いただきました。

乾杯の後、懇親が始まり、寮生は会員の方や来賓、北区に住んでいる中国の方達などと話をしたり、記念写真を撮ったりとリラックスした雰囲気では進んでいきました。

会の中盤では内モンゴルから来た留学生の馬頭琴の演奏やモンゴルの歌の披露があり、会員の方のハーモニカ演奏と歌による「北国の春」では、後楽寮生も舞台上上がり会員の方達と合唱をしました。そして、留学生事業部の周部長の夫人である張莉莉さんによる京劇「龍江頌」は拍手喝采を浴びました。最後には全員で「大海啊故郷」を中国語と日本語の歌詞で大合唱し、クライマックスを迎えました。



全員で大合唱

寮生は日ごろ研究や論文などで忙しい中での活動でしたが、日本語で交流をする数少ない貴重な経験であったと思います。今後とも北区日中友好協会とは引き続き交流をしていきたいと思っています。

(留学生事業部)

◆ “世代友好中日青少年友好交流文芸晚会” で後楽寮生が大活躍



“後楽寮合唱団”が歌を披露

5月9日、日中国交正常化40周年と日中国民交流友好年を記念し、全日本中国留學人員友好聯誼會(全日本學友會)主催で代々木の国立青少年オリンピックセンターにて“世代友好中日青少年友好交流文芸晚会”が行われました。

これには東京大学、早稲田大学、慶應義塾大学、東京工業大学などから日中双方の大学生が参加し、700名以上の観客が歌や楽器演奏などのパフォーマンスに魅了されました。

“世代友好”と書かれた舞台上では日中の男女4人の進行で、会はスタートしました。トップバッターである後楽寮生、孟繁傑さんのソプラノで演目が始まり、尺八と楊琴の演奏、書道と変面という変わったコラボレーションや太極拳披露など日本と中国の学生たちによる様々な演目で会場は盛り上がりました。

後楽寮生も30名以上が出演し、“後楽寮合唱団”を編成、「翼をください」と「我和我的祖国」を歌いました。留学生による「世界に一つだけの花」には2名の寮生が1晩限りのSMAPとして舞台上立ちました。

総監督、舞台監督、音楽監督も後楽寮生が担当し、演目前の舞台準備は全員後楽寮生であり、後楽寮生の団結力とボランティア精神が如何なく発揮された会となりました。

(留学生事業部)

トピック

◆中国国際交流協会主催「理解と協力」対話活動 開会式における基調報告

日中友好会館 会長 江田 五月

5月22日に開催された中国国際交流協会主催フォーラム「2012 理解と協力対話活動」にて江田五月会長が外国側参加者代表として基調報告を行いました。

議長、国際交流協会と各国の指導者の皆さん。本日は、中国側の卓越した指導力により、このような素晴らしい国際フォーラムが成功裏に開催され、発言の機会までいただき心から感謝いたします。

まず、私自身の簡単な自己紹介をいたします。私は、1941年の本日、つまり太平洋戦争勃発の直前に生まれました。今日が71歳の誕生日です。私の父は戦前、戦争に反対して2年8ヶ月獄中生活を送りました。出所後、日本ではどのような目に会うか分からず、中国に渡って河北省の石家荘で水利工事に従事しました。これなら戦後も中国人民の役に立つからです。やがて戦争が終わり、父は母と私と生まれたばかりの弟と、そして大勢の日本人とを連れて、着のみ着のままで日本に引き揚げました。私自身は幼すぎてほとんど記憶に残っていませんが、中国の皆さんに大変にお世話になったと思います。

その父が政治闘争の中で無念の死を遂げ、今日が35年目の命日となります。私がお後を引き受けて日本の民主主義と政権交代政治の実現を目指し、やっと2009年9月に民主党政権ができました。その2年前から3年間、私は民主党が多数派となった参議院で議長を務めました。昨年は法務大臣と環境大臣も務め、東日本大震災では閣僚の一人として悪戦苦闘しました。その際の国際社会からのご支援に、ここで改めて

心からの感謝を申し上げます。昨秋からは、現在政権を担っている民主党の最高顧問を務めています。

日中両国は一衣帯水の隣国関係で、課題もたくさんありますが、戦略的互惠関係を築くことが何よりも大切です。特に今年は、日中国交正常化40周年で、昨年末に両国首脳で今年を「日中国民交流友好年」と定め、多彩な活動を展開しているところです。しかし本日のテーマは、このような二国間関係を越えた世界的規模の、特に中国を取り巻く世界やアジア太平洋地域の平和構築と安定した経済、社会、文化の関係構築だと思えます。そこで、この視点からの私の若干の問題提起を試みてみます。

長い人類の歴史を辿れば、中国は古代の四大文明のひとつを担った時代以来一貫して、世界の進歩と発展の中心のひとつとして大きな役割を果たしてきました。表音文字の壮大な漢字の体系や印刷術、孔子をはじめとする中国哲学などは、今もなお人類の文明の根幹を形成しています。確かに近代から現代史の中で、西欧列強の膨張と征服の濁流が世界を覆い、中国が大変な辛酸をなめた時期がありました。日本もこれに荷担したことについては、日本政府として公式に反省と謝罪の態度を明確にしております。その後、中国は社会主義革命により新しいスタートを切り、改革・解放の旗を高く掲げて今やGDPでは日本を抜いて世界

有数の経済大国になっています。中国が国際社会の課題解決のために果たすべき役割は、極めて大きくなっているのです。

その一方で世界の現状を見れば、輸送技術や情報通信技術といった交流手段の進歩がグローバル化を促し、北京オリンピックの「同じ世界、同じ夢（One World, One Dream）」を世界中の人々が実感するに至っています。その結果、我々の生活は格段に便利になりましたが、相互依存関係が広範囲かつ複雑に広がった結果、多様な摩擦も生まれています。

このような情勢の中、従来の二国間関係や国連を中心とした国際協調の枠組みに加え、目的に応じた新たな多国間協調が活発化し、例えばアジアでは、東南アジア諸国連合、ASEAN 地域フォーラム、アジア太平洋経済協力、東アジア首脳会議、日中韓サミットなど、重層的な枠組みが形成されてきました。このような動きは、まさに本フォーラムのテーマである「理解と協力」を促進するためです。

この方向は、今後も決して後退させてはならず私たちは皆、確信を持ってこの前進のために努力すべきです。いかなる懸案や摩擦があろうとも、これを武力で解決しようとする動きを前もって摘み取り、戦火が勃発することを決して許してはなりません。平和で安定的なアジア大洋州地域と平和な世界があってこそ、私たちが繁栄を享受することが可能となるのです。争いの中に利益を見出す国はないというのが私の揺るぎない確信です。

同時に私は、21世紀の世界を主導する理念は、自然環境と人類との共存関係の構築だと思っています。自然の猛威を征服した上に人類の大いなる繁栄を打ち立てる時代

はそろそろ終わり、自然との根源的な共存の中に人類の進歩と発展を図ることが大切になってきたと思っています。私たち日本人は皆、実は深刻な反省に直面しています。言うまでもなく、昨年の大震災が提起した課題です。大地震と巨大津波の被害も甚大でしたが、原子力発電所事故はその質において、もっと深刻です。津波からは私たちは逃げるほかに術はないのですが、原発事故からは逃る術がないのです。

誤解があってはいけないので付け加えておきますが、日本は今、原発サイトの近辺以外の地域は安全で、国民も普段どおりの生活を送っているのです。国際社会の皆さんもどうぞ安心して日本に来て下さい。原発事故が私たちに問うている課題は、人類が生み出す科学技術が自然を際限なく克服できるという考え方を改め、自然との調和をどう図るかということも科学技術の重要な達成目標に据えるべきだということです。この方向性につき、国際的共通理解と協力を築き上げることも、国際的フォーラムの重要課題となると思います。

中国は今、世界中のいかなる片隅にも、活動を広げつつあります。その中国が、中国のためだけに存在感を示すのではなく、新しい世界のあり方をみんなと一緒に探っていくことに指導性を発揮すれば、中国は世界中から尊敬を集めることになるでしょう。中国の仲間の皆さんのご努力をいただいて、本フォーラムを通じて、世界各国の皆さまの知見を拝聴し、突っ込んだ意見交換を行い、少しでも国際社会における「理解と協力」が促進されるようなフォーラムにしたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

◆日中国交正常化 40 周年 — 友好・反覇権・歴史が原点

日中友好会館 前副会長 谷野 作太郎

日中国交正常化 40 周年にあたっての記事が、5 月に
共同通信社より配信され、各紙で取り上げられました。

今年の日中国交正常化 40 周年。私たちはこの節目の年に当たり、あらためて 40 年前、日中両国がさまざまな困難を乗り越え、国交正常化を実現したその原点はなんだったかということについて、考えてみるべきではなからうか。近年における日中関係を取り巻く内外の状況を見るにつけ、そのような思いを強くする。

日中国交正常化の原点。その第一は日本、中国というアジアの二つの大国がお互いの努力を通じ安定した良好な関係を維持し、発展させてゆくことは、単に日本、中国それぞれの利益に沿うばかりでなく、そのような日中関係は、アジア、世界の平和と発展という大きな命題に向けて必要にして不可欠だということである。

日中両国はさまざまな要因により、折々の風波を経験することはこれからも避けられないことだ。しかし、このような時に襲い来る風波にたじろがず、あるいはそれに身を任せるのではなく、お互いに努力して両国の関係を上手に運営してゆくことである。そのためには日中それぞれの側における政治のリーダーたちの強い意志と指導力が必要とされることはいまでもない。

日中国交正常化の中国側の立役者、周恩来首相は両国関係運用のキーワードとして「求同存異」（相違点は残し、共通点を求める）ということをししばしば口にした。ところが、近年の両国関係を見ていると、これとは反対に日中それぞれの側で、ともするとポピュリズムに身を委ね、安定した両国関係維持に向けての強い政治的意思を欠き、その結果「小異」を「大異」にまで広げてしまうという状況があるのではないだろうか。

第二は、「反覇権」ということである。

これは、1972 年の日中国交正常化の折の両国の共同声明および 78 年の日中平和友好条約において両国が固く約束しあった原則である。同じことは、中国は米国との間においてもお互いに認め合った。長きに渡り透明性を欠いたまま膨れてゆく中国の軍事費。はたまた、いつぞやは中国の海軍首脳から米国の太平洋軍事司令官に対し、ハワイを起点として太平洋の勢力圏を米中の間で二分するという提案があったなどという話が伝わってくるにつけ、この思いを強くする。

第三は、今なお日中の間で時折問題になるいわゆる「歴史認識」の問題である。

中国の元文化次官、劉徳有氏の回顧録「心霊之約」によれば、60 年、野間宏、亀井勝一郎両氏ら日本作家訪中代表団の会見において、中国の陳毅・副首相兼外相は次のように述べた。

「皆さん、ありがとう。われわれは過去のことは過ぎ去ったものにしようと言い、あなたたちは、日本人として過去を忘れてはいけない、と言われる。そうであるなら、両国人民は本当の友好を実現できるでしょう」

このことも 40 年前の正常化の時には、日中両国の側で多くの人々が共有した気持であったはずだ。しかしこの辺のところも、その後往々にして逆の状況がみられた。ちなみに陳毅將軍も前記発言に続けてこう言っている。

「逆にわれわれが日本人をずっと恨み続け、あなた方日本人は中国を傷つけたことをきれいさっぱり忘れてしまうようなことになったら、日中両国はいつまでたっても友好関係を実現することはできないでしょう」

ドキュメント

◆日中歴史研究・出版助成事業

日中友好会館 前理事長 村上 立躬

村山総理の戦後 50 周年 (1995 年) に当たり「アジア平和友好交流計画」が発出され、その中の 10 年間に渉る日中歴史研究事業の一環として研究・出版助成事業が開始された。この事業の一つとして 2002 年が日中国交正常化 30 周年に当たるので日本と中国で各々記念出版の企画が開始された。

〈日本側〉「現代中国を作った人びと」

当時年間四万人を超す高校生が中国へ修学旅行に出かけ他方中国からも高校生訪日団の来訪が両国政府の協議の上で定例化しかけてきた。しかし旅行社が用意するのは観光案内書であり国際理解を深めるのに相応しいガイドブックはなかなか見当たらない。そこで特に日本との関わり合いを折り込んだ中国の近代化史を副読本のような入門書に仕立て上げたいと考えた。

当時高校の日本史 (社会科) の授業が幕末かせいぜい明治の半ばあたりで 2 学年末を迎え、3 年生になると大学入試準備に入り、大学入試においても明治中期以降は出題されない傾向が強く教える側も時間とエネルギーをかけないので、近代化史教育空洞化 (特に近隣アジアとの関係) の時代が戦後教育において一般化していた。修学旅行で訪中する学校で社会科担当の熱心な先生は手作りの案内パンフレットを作って配布してくれたこともあった。訪中するのであれば少しでも近現代中国についての知識をもって行って欲しいという気持ちからこの企画はスタートしたのである。

当時隅谷三喜男先生を座長とする日中歴史研究評議員会の評議員であった鮫島敬治先生に相談し学術書でなく高校生に理解し易い読物風のものにする方針を了承して頂き、1996 年日中近現代史編集委員会を発足させた。

委員の構成は次の通りである。読み物性

を高めるために事件や項目よりも人物を軸に読み易いようにふりがな付とし、70 年代・80 年代に北京に駐在した報道機関の方々から成る各委員が人物毎に担当する形とした。

座長 鮫島敬治 (日本経済新聞)

「周恩来」担当

委員 近藤龍夫 (朝日新聞)

「蒋介石」「鄧小平」担当

委員 山本展男 (毎日新聞)

「魯迅」「溥儀」担当

委員 布施茂芳 (共同通信社)

「孫文」「張学良」担当

委員 丹藤佳紀 (読売新聞)

「李鴻章」「毛沢東」担当

事務局 日中歴史研究センター

村上 立躬 尾形 洋一 丸山 宗子

当初、出版、販売を講談社に委託する考えであったが編集方針で委員会と意見が一致せず委員全員の希望で自主編纂することとし、上着のポケットに入れられるサイズの新書版 272 頁に収め、2002 年 9 月 9 日 2000 部を出版した。

企画してから足かけ 6 年を要したが委員の先生方はご多忙の中集まって下さり、高校生向きにはどの様な構成にすべきか総量はその位が適当か等あらゆる角度から検討し熱心に議論の上で方針が定まった。各自の分担が決まってからは最低月 1 回は作業を進め原稿を読み合って推敲し固めていった。

大変なご苦勞であったがボランティアで引き受け頂き、毎回些少な交通費をお支払いするだけでしたが、会議の後の豫園での談話会では北京駐在中の昔話から政局まで楽しい一時を過ごして頂いた。

出来上がった本は修学旅行を実施している高校に紹介し、多くの高校生に読んでもらい出版の目的を果たすことができた。北京はじめ東アジア各地に常駐経験を持つジャーナリスト OB 諸氏の積極的参加が試行錯誤と曲折の過程でこの作業は埋没したの

ではないかと思う。委員の方々に対する深謝の念にたえない。

〈中国側〉「友誼鑄春秋」

（友情で綴る戦後史の一コマ）

1999年末、中日関係史学会（会長属以寧）は1945年の日本降伏から新中国成立初期に数多くの日本人が中国の革命と建設に貢献した事績を検証、編纂して後世に貴重な歴史として残すことにした。

1年に渡る準備を経て、編纂委員会を設立し、2001年3月から取材チームが日中友好会館日中歴史研究センターの協力のもとで数回訪日して生存している方々に会って聞き書きし、中国国内でも当時の事情に詳しい人達を訪ねて史料収集につとめ、2002年8月に「友誼鑄春秋」第一巻の刊行に至った。

編集委員会

顧問 劉徳有

編集長 呉学文

副編集長 丁民 朱福来

委員 丁民 朱福来 呉学文 孫東民

高海寛 張曜棟 張雲方 馮昭李

湯重両 劉智剛

第一巻では28名の日本人の功績が紹介されたが、更に記録すべき日本人の業績が多数あるので取材を続け戦後60周年に当たる2005年第二集を刊行し、42名の方々の功績が紹介された。実は中国側としては第三集の原稿ができていたが、日中友好会館の日中歴史研究の出版助成事業が終了していたので刊行を見送っている。いずれの日にか実現して完結させたいと願っている。この事業は日中友好会館が取材チームの受け入れから出版に至る迄全面的に支持協力し、当時の後藤田正晴会長は北京での出版記念祝賀会に出席し、また完成した日本語版の帯書に次の言葉を添えられた。また中国側も劉徳有先生が帯書に同じく言葉を添えられた。

第一集

「友好の原点ここにあり。」（後藤田正晴）

埋もれていた史実が初めて発掘された。日中両国の無名の人々の苦しみと喜びを共にする中で、友情を育み信頼関係を築き上げた無数の事績こそまさに友好の原点と云えよう。登場人物たちの高い志と壮絶な生き様は、今の時代に生きる私たちの叱咤激励でもある。若い世代に一読を進める所以である。」

「真の日中友好史を知るための必読書。」

（劉徳有）

新中国を、もし聳え立つ記念碑に譬えるならば、その誕生と建設のために血と汗を流した彼らの名も、中国人と並んで刻まれ、永遠に後世に残るであろう。「平和と発展のための友好協力パートナーシップ」の構築をめざす今日、彼らの手で播かれた友好の種子は、花ひらき、実を結ぶにちがいない。」

第二集

「草の根の交流こそ」（後藤田正晴）

この「新中国に貢献した日本人たち」の続編に登場する人々は戦争で破壊された日中両国の友好を自ら汗と血で修復して、今日の礎を築かれた。両国関係が厳しい状況にあるとき、地道な草の根の交流にという原点に立ち返るよう本書の人々は呼びかけている。」

「いま掘り起こす感動的な中日戦後史」

（劉徳有）

侵略戦争を起こした「一握りの軍国主義者」と日本の一般民衆とは違うのだということ、この人たちは身をもって示してくれ、中日両国人民が問題の本質を正しく捉えるうえで、大いに役立つものと思われる。読者の心を揺さぶるゆえんである。」

日中友好交流の拠点であることを使命とする日中友好会館としてこの事業に貢献できたことは大変光栄であり、中国中日関係史学会の皆様のご尽力に心から誠意と敬意を表します。

会館行事と人の動き 5/1～31

● 会館行事

5/2～5/4 ▶ 小田原ホームステイ

5/ 9 ▶ 劉智剛副会長ご夫妻来日、歓迎会

5/ 11 ▶ 第2回理事会

▶ 主催展「墨・劇ー水墨で描く中国伝統劇」開幕式・歓迎宴(5/27閉幕)

5/ 12 ▶ 北京大学国際合作部来館、後楽寮見学

5/ 16 ▶ 後楽会中国旅行説明会・結団式

5/ 17 ▶ 後楽会中国画教室

5/ 20 ▶ 巡回展「中国貴州ろうけつ染め展」閉幕(山梨県身延なかとみ現代工芸美術館)

5/ 31 ▶ 貸美催事「古今を刺繍する中国風」開幕式

▶ 後楽会談話会「電子音楽の世界と作曲」(講師:班文林)

● 来館・訪問・面会

5/ 2 ▶ 東京華僑総会 廖雅彦会長 往訪(武田理事長)

5/ 7 ▶ 東京華僑総会 往訪(王理事)

5/15 ▶ 中国美術館旅局長との会食(王理事)

● 行事参加、その他の活動

5/ 5 ▶ 松山バレエ団ご招待「コッペリア」鑑賞会(後楽寮生100名)

5/ 9 ▶ 世代友好中日青少年友好交流文芸晚会(於:国立青少年オリンピックセンター、後楽寮生)

5/26 ▶ 北区日中友好協会「日中友好促進懇親会」(於:北とぴあ、後楽寮生15名)